

「自己研修の進め方」事例の収集及び手引の作成

《研究協力機関及び研究協力員》

久慈市立久慈小学校	教諭	佐々木 一向
久慈市立久慈小学校	教諭	小菅 晴香
久慈市立久慈小学校	教諭	遠藤 勇太
久慈市立久慈小学校	教諭	佐藤 愛
洋野町立中野小学校	養護教諭	駒井 奈々
久慈市立久慈中学校	教諭	工藤 聖士
久慈市立久慈中学校	教諭	角掛 友喜
久慈市立久慈中学校	教諭	及川 愛美子
久慈市立久慈中学校	教諭	菊池 愛
県立花巻農業高等学校	教諭	畠山 雅美
県立水沢農業高等学校	教諭	佐々木 偉彦
県立大船渡高等学校	教諭	松田 光正
県立盛岡視覚支援学校	教諭	滝村 真一
県立盛岡峰南高等支援学校	教諭	大河原 展子
県立釜石祥雲支援学校	教諭	立花 周子

平成27年3月

岩手県立総合教育センター

情報・産業教育担当	石川 修司
理科教育担当	立花 起一
理科教育担当	鈴木 勇二
企画担当	上田 淳悟
教科領域教育担当	鈴木 裕
教科領域教育担当	高橋 成周
教育支援相談担当	森 和佳子
教育支援相談担当	島香 実
情報・産業教育担当	熊谷 明宏

《空白のページ》

《目 次》

I	研究目的	1
II	研究の目標	1
III	研究の内容と方法	1
1	研究の内容と方法	1
2	実践事例の収集に関わる研究協力機関及び研究協力員	1
IV	研究結果の分析と考察	2
1	「自己研修の進め方」に関する基本構想	2
(1)	自己研修の必要性	2
(2)	自己研修を進めるための方法・手立て	2
(3)	自己研修の手引を作成する意義	3
2	「自己研修の進め方」テキストを活用した実践事例の収集	3
(1)	「自己研修の進め方」テキスト	3
(2)	「自己研修の進め方」十の段階	3
(3)	「自己研修の進め方」の配慮事項	5
(4)	実践事例の収集	6
3	自己研修の研修講座とアンケートの分析	7
(1)	講義「自己研修の意義と進め方」	7
(2)	講義「自己研修の意義と進め方」受講者アンケートの分析	8
4	「自己研修の進め方」テキストを活用した研修会	9
5	「自己研修の進め方」手引の作成	9
(1)	「自己研修の進め方」テキストの見直し	9
(2)	「自己研修の進め方」手引	9
V	研究のまとめと今後の課題	10
1	研究の成果	10
2	今後の課題	10
	<おわりに>	10
	【参考文献】	10

I 研究目的

教員研修体系検討委員会で初任者研修要領の内容が改編され、3年間にわたり教員としての自覚を高めるとともに、円滑に教育活動に入り、可能な限り自立して教育活動を展開していくための素地素養や実践的指導力の育成を図ることが求められている。

今後岩手県では、教員採用の増加が見込まれており、それにより教員全体の年齢構成のアンバランスが生じることが予想される。このことにより、従来と同様の取組方で若手教員を育てていくには厳しい環境になることが考えられる。

このような状況を改善し、若手教員が自己研修の取組を通して、自立して教育活動を展開していくことができるように、平成25年度当センターで「自己研修の進め方」テキストを作成した。

本研究は、「自己研修の進め方」テキストの有効性を確認し、テキストを活用した事例を収集し、手引にまとめることにより、若手教員が自己研修に取り組むための手本として活用されることを期待するものである。

II 研究の目標

「自己研修の進め方」テキストを有効に活用するための、事例をもとにした手引の作成

III 研究の内容と方法

1 研究の内容と方法

- (1) 「自己研修の進め方」に関する基本構想の立案（文献法）
- (2) 「自己研修の進め方」テキストを活用した実践事例の収集（調査法）
- (3) 自己研修に関するアンケートの収集と分析（質問紙法）
- (4) 「自己研修の進め方」テキストを活用した研修会（実践、質問紙法）
- (5) 「自己研修の進め方」手引の作成
- (6) 研究のまとめ

2 実践事例の収集に関わる研究協力機関及び研究協力員

- (1) 県北教育事務所管内（久慈市教育委員会、洋野町教育委員会）

久慈市立久慈小学校	教諭	佐々木 一向
久慈市立久慈小学校	教諭	小菅 晴香
久慈市立久慈小学校	教諭	遠藤 勇太
久慈市立久慈小学校	教諭	佐藤 愛
洋野町立中野小学校	養護教諭	駒井 奈々
久慈市立久慈中学校	教諭	工藤 聖士
久慈市立久慈中学校	教諭	角掛 友喜
久慈市立久慈中学校	教諭	及川 愛美子
久慈市立久慈中学校	教諭	菊池 愛

- (2) 県立学校

県立花巻農業高等学校	教諭	畠山 雅美
県立水沢農業高等学校	教諭	佐々木 偉彦
県立大船渡高等学校	教諭	松田 光正

県立盛岡視覚支援学校 教諭 滝村 真一
県立盛岡峰南高等支援学校 教諭 大河原 展子
県立釜石祥雲支援学校 教諭 立花 周子

IV 研究結果の分析と考察

1 「自己研修の進め方」に関する基本構想

(1) 自己研修の必要性

中央教育審議会「教員の資質能力向上特別部会」（2012. 6. 25）では、現状と課題を以下のようにまとめ報告している。

○グローバル化や情報化，少子高齢化など社会の急激な変化に伴い，高度化・複雑化する諸課題への対応と，求められる人材育成像の変化への対応が必要。

○21世紀を生き抜くための力を育成するため，これからの学校は，基礎的・基本的な知識・技能の習得に加え，思考力・判断力・表現力等の育成や学習意欲の向上，多様な人間関係を結んでいく力や習慣の形成等を重視。これらは，様々な言語活動や協働的な学習活動等を通じて効果的に育まれることに留意。

○このため，このような新たな学びを支える教員の養成と，時代の要請を踏まえた学び続ける教員像の確立が求められている。

○一方，いじめ・不登校等への対応，特別支援教育の充実，ICTの活用など，諸課題への対応も必要。

○これらを踏まえ，教育委員会と大学との連携・協働により，教職生活全体を通じて学び続ける教員を継続的に支援するための一体的な改革を行う必要がある。

これを受けて岩手県教育委員会「教員研修体系検討委員会」では，初任者研修要領の改編を行い，3年間にわたり教員としての自覚を高めるとともに，円滑に教育活動に入り，可能な限り自立して教育活動を展開していくための素地素養や実践的指導力の育成を図ることが求められ，平成26年度より実施している。これは，中央教育審議会の「学び続ける教員像の確立」と「学び続ける教員を継続的に支援するための一体的な改革」に対応している。

さらに，初任者研修改編として「学び続ける教員像の確立」のために当センターで行われる講座で「自己研修の意義と進め方」の講義や演習を取り入れ，継続的に取り組むシステムを構築している。

(2) 自己研修を進めるための方法・手立て

平成26年度初任者研修の改編にあたり，平成25年度に「自己研修の進め方」テキストを当センターで作成した。教職員の人材育成に関する検討委員会報告（2007）では，基礎の形成期（1～5年）での自己の課題について以下のように記している。

学習指導を中心に，児童生徒理解，生徒指導，学級経営など，教育活動に関する基礎的・基本的な職務遂行能力を身につけている。

教員としての使命感を強く自覚し，社会人としての常識を徹底的に身につけている。

このように，教員は学習指導だけを行うのではなく，児童生徒理解や生徒指導，学級経営等の職務を遂行していかなければならないことを示している。本研究では，学習指導や児童生徒理解，生徒指導，学級経営等を「指導の場面」と呼ぶ。自己研修は教員一人ひとりの力量に合

わせ課題を設定し、PDC Aのマネジメントサイクルを活用し課題を解決することを目的としている。つまり、「指導の場面」全てにおいて自己研修を取り入れることができる。自己研修の取組では、学習環境の改善や児童生徒の伸長、教師の力量の向上を期待することができる。

さらに、自己研修ではポートフォリオを推奨しており、自己研修の「振り返り」の段階でそのポートフォリオを活用し文章化する。自己研修の各段階については、2章『「自己研修の進め方」テキストを活用した実践事例の収集』で詳しく説明をする。

(3) 自己研修の手引を作成する意義

平成25年度に「自己研修の進め方」テキストを作成し自己研修の手法は掲載したが、具体的な事例は掲載されていない。1年目の初任者研修では講義で自己研修の進め方を学習し、2年目研修では赴任校で自己研修を行い、3年目研修ではその自己研修の取組をセンター研修で発表することを目指している。しかし、この自己研修を研修講座の講義に取り入れても、教職経験の浅い若手教員は具体的にイメージすることが容易ではないため、自己研修について十分に理解されないことが予想される。2年目研修以降、自己研修を行うにあたり、事例や取組が示されていない状況で実施することは難しいと考えられる。

そこで、本研究では各校種や「指導の場面」として、学習指導や児童生徒理解、生徒指導、学級経営等に配慮した手引を作成し、研修講座の内容の充実や2年目研修での手本として活用できる手引を作成することを目的としている。

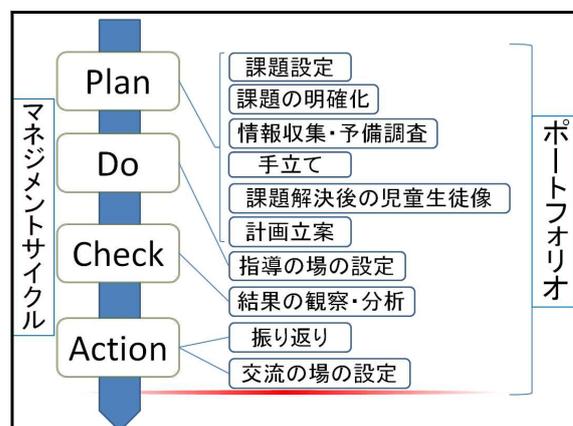
2 「自己研修の進め方」テキストを活用した実践事例の収集

《 》の表記については、『平成27年度版「自己研修の進め方」テキスト』において新たに変更を検討している事項である。

(1) 「自己研修の進め方」テキスト

「自己研修の進め方」テキストは、「日本語教師のためのアクション・リサーチ」横溝(2000)の考え方を基に、内容を精選し十の段階に収束した。十の段階は以下の通りである。

- ・ 課題設定《自己研修のテーマ》
- ・ 課題《テーマ》の明確化
- ・ 情報収集・予備調査
- ・ 手立て
- ・ 課題《テーマ》解決後の児童生徒像
- ・ 計画立案
- ・ 指導の場の設定《計画実施》
- ・ 結果の観察・分析
- ・ 振り返り
- ・ 交流の場の設定



【図1】 マネジメントサイクルと自己研修

この十の段階を行うことにより課題《自己研修のテーマ》を解決することができ、学習環境の改善や児童生徒の伸長や教師の力量が向上する。課題《テーマ》が解決できなかった場合でもそれは単なる失敗ではなく、もう一度自己研修の取組に立ち返り自己を見つめ直し、物事の本質に目を向けることの大切さに気付く取組である。また、自己研修は一度の取組で完結するものではなく、課題解決後新たな課題《テーマ》や取組の必要性を研修者自身が感じるはずである。これによって学び続ける教師を育成するきっかけになると考える。

(2) 「自己研修の進め方」十の段階

自己研修では、前章でも述べたように、学習指導や児童生徒理解、生徒指導、学級経営等の

「指導の場面」において活用することができる。一連の流れをこなすだけではなく、課題設定《自己研修のテーマ》に戻ったり、計画立案へ戻ったりすることも可能である。場合によっては、学級や児童生徒の日常の様子から問題点を明確にして課題《テーマ》を設定することも考えられる。

ア 課題設定《自己研修のテーマ》

課題設定《自己研修のテーマ》は、「指導の場面」から自分の力量に合ったものを選択する。しかし、課題《テーマ》が抽象的なものや、複雑なものを選択した場合、一連の流れが止まってしまう。自分の力量や児童生徒の実態に即した課題設定《自己研修のテーマ》が自己研修には求められている。

イ 課題《テーマ》の明確化

設定した課題《テーマ》の原因や要因を見極める。例えば、学習指導において、「児童の計算能力を向上させたい。」と課題《テーマ》を設定した場合、繰り上がりの計算ができないことや数の合成ができないこと、計算自体が遅いことなど様々な要因が考えられる。その場合は、課題《テーマ》を明確にし、もう一度課題設定《自己研修のテーマ》に戻ることも考えられる。

ウ 情報収集・予備調査

書籍やインターネット上の論文など様々な文献がある。自分の学級や児童生徒の実態に合ったものを取捨選択する必要がある。しかし、書籍や論文が児童生徒の実態にそのまま合致することはほとんどないので、書籍や論文は参考程度とする。

「指導の場面」では、予備調査や事前テストが必要になる場合がある。児童生徒への負担を考えて、調査の内容や項目数は必要最低限にとどめなければならない。

エ 手立て

課題《テーマ》を解決するための手立てを立案する。明確化された課題《テーマ》を、どのように解決していくのか、情報収集や予備調査をもとに考える。

オ 課題《テーマ》解決後の児童生徒像

手立てを基に実施した後、児童生徒がどのように変容するか、また、教室内の学習環境がどのように改善されるのか、児童生徒にどのような伸長が見られるのか具体的にイメージする。

カ 計画立案

手立てを遂行するために計画を立案する。課題《テーマ》の内容によっては長期にわたるものもあるので、児童生徒に負担がかからないよう実施には配慮する必要がある。

キ 指導の場の設定《計画実施》

計画を実施する。実際の計画を実施する場合、必要に応じて記録をとることも必要になる。また、授業の場合は他の先生に参観してもらい課題《テーマ》に対して効果の有無を判断してもらおうことも必要になる。

ク 結果の観察・分析

実施後、課題解決後の児童生徒像にどこまで近づくことができたのかを分析する。出てきた結果を素直に読み解き、まとめる。もしも、予想していた結果が導き出されなかった場合には、もう一度前の段階に戻り再考してみることも必要になる。

ケ 振り返り

自己研修の一連の流れを文章化する。交流することも考えて、口語体でまとめる。

振り返りにおいては、学習環境の改善や児童生徒の伸長だけをまとめるだけではなく、教師として力量が向上した部分をまとめることも、自分を知るため（メタ認知）に必要となる。また、課題の解決をもって自己研修が終了するのではなく、さらなる児童生徒の伸長のために新たな課題《テーマ》を設定する場合もある。

コ 交流の場の設定

本研究においては、3年目研修において同じ年度に採用された先生と、ワークショップ形式で研究協議をすることを想定している。その他にも、校内研究や教育事務所、教育委員会での研修等での活用も考えられる。経験年数の違いや教科が違う多くの人と交流することで多様な意見をもらい、新たな視点や課題《テーマ》に出会う場として設定している。

自己研修で大切なことは、他の先生との関わりである。管理職はもちろんのこと、同じ学年を組む先生や同じ教科の先生、生徒指導担当や養護教諭等の先生から課題設定《自己研修のテーマ》や手立て、自己研修の実施に対してアドバイスをもらうことで、手立ての立案や実施する場にいかし進めていくことができる。

また、自己研修での取組は、個人情報を取り扱う場合もあるのでポートフォリオやレポートを作成する場合、配慮が必要になる。

そして、自己研修は、振り返りや交流を行うことによって新たな課題《テーマ》が生まれる場合がある。その新たな課題《テーマ》に対して更に自己研修を行うことにより、学び続ける教師像の確立につながるものとする。

(3) 「自己研修の進め方」の配慮事項

ア 自己研修の目的

「なぜ、何のために」自己研修をするのか理解することが大切である。自己研修は教師の力量の向上をさせ、さらには学習環境の改善や児童生徒の伸長していくために行うことを念頭に置き進めなければならない。

イ 自分自身のニーズ

自己研修を進めるにあたっては、現在の課題、学びたい内容、児童生徒につけたい力など、自分自身のニーズが出発点になる。児童生徒の様子や自分自身の指導を見つめ直し、今自分に必要なことは何かを明確にして、課題《テーマ》を設定し自己研修を進めていく必要がある。

自分自身のニーズを出発点に研修を進めていくことは、主体的な研修につながるが、単なる思いつきで課題《テーマ》を設定してはいけない。学習環境を見つめ直したり、情報収集して見識を深めたりしながら、今取り組むべき課題《テーマ》を明らかにする必要がある。

また、教師として自分自身ができていることやできていないことをしっかりと認識（メタ認知）し、自己の取り組むべき方向性を見出し、学び続ける教師を目指さなければならない。

ウ 児童生徒と共に成長していく視点

自己研修では、課題設定《自己研修のテーマ》し解決の手立てを実行しながら、実践を積み重ねていくことで、教師の自己成長につながる。児童生徒は研究の対象者ではなく、共同研究者と考えなければならない。自己研修の取組は、児童生徒の学習環境を改善するなど、児童生徒に還元されるのである。「計画（P）」、「実践（D）」、「観察・分析（C）」、「振

り返り（A）」のサイクルを有効に生かし、自己研修を行う教師と児童生徒が共に成長していくという視点を大切に進めなければならない。

エ 周囲の先生方や上司との対話

自己研修と言えども、周囲の先生との関わりは大切である。自己研修を進める過程で、うまくいかない場合や思うように進まない場合など、周りの先生に自ら相談する姿勢が求められる。同じような経験をしたことがある先生であれば、的確なアドバイスを受けることができる。

計画を実施として授業を行う場合、可能であれば同学年の先生や同じ教科の先生に参観してしてもらおう。授業の場合、授業者は主観的になり、子どもたちの変化や気付き等を見逃す場合がある。そこで、自己研修について内容の妥当性について客観的に判断してもらうことも大切である。

また、「交流の場の設定」では、校内や校外の先生方と交流をすることにより、新たな手立てや方略を得ることができ、今後の教職での経験にいかされると考える。さらに、交流においては、他の先生方と意見を交わすことによって、新たなつながりを生む利点もある。

オ 客観的に振り返る

「振り返り」でまとめた記録を活用しながら、自己研修全体を振り返る機会を設定していくことは重要である。時には、他の先生方からも意見をもらい、客観的に評価することも必要である。自分自身の取組を振り返り、決して独り善がりの指導にならないよう、謙虚に周囲の声に耳を傾け、自己の実践を見つめ直し、児童生徒の学習環境の改善に努める姿勢こそが、学び続ける教師像の確立につながるものである。

(4) 実践事例の収集

本研究では事例の収集において、各校種の研究協力員から協力を得た。研究協力員は採用2、3年目の先生に限定した。それは、自己研修の課題設定には教職経験の差が影響するものと考えたからである。例えば、教職10年目の先生は、授業を行ってきた時数に大きな差があり、児童生徒理解に関する考え方、学級経営に対する思いなど、初任者よりはるかに深まっていると考える。そこで、初任者の経験値に近い2、3年目の先生を中心に事例を収集することにした。

ア 研究協力員会議（県立学校籍）

高等学校並びに特別支援学校の研究協力員は2回の会議を当センターで行った。

1回目の会議（7月）では、自己研修の進め方に関する基本的な考え方の説明、課題設定と情報共有を校種に分かれて行った。平成25年度以前の県立学校の初任者は、課題研修を行っているので、自分が取り組んだ課題を本年度の研究の成果として、ポートフォリオを整理し、レポートを提出してもよいことを確認した。

2回目の会議（11月）では、研究協力員の取組について交流を行い、最終的にまとめるレポートの様式について提示した。

イ 研究協力校訪問（義務教育籍）

小学校と中学校は、県北教育事務所の配慮により久慈地区を中心に進めることができた。

1回目の訪問（8月）では、自己研修の進め方に関する基本的な考え方の説明、課題設定を行った。久慈小学校については、校内研究で自己研修の手法に取り組んでおり、授業研究会を中心に行う計画を立てることができた。また、中野小学校については、研究協力員だけの取組ではなく、自己研修の幅広い活用を促すために、校長をはじめとする校内の先生方のサポートのもと進めることができた。

2回目の訪問は、中野小学校が11月、久慈小学校と久慈中学校が12月に行われた。中野小学校では、5年生の歯科指導の授業実践（校内研究会）と進捗状況の確認を行った。久慈小学校と久慈中学校では、自己研修の進捗状況の確認を含めた自己研修への取組の交流を行った。

ウ 事例について

研究協力員の課題は、「指導の場面」学習指導や児童生徒理解、生徒指導、学級経営等に分かれることが望ましい。しかし、校種や校内体制、専門性の違いにより、きれいに分散するとは限らない。しかも、自己研修の観点から、研修者が一番身近に感じることを課題《テーマ》とすることを趣旨とするため、課題設定《自己研修のテーマ》は協力員に任せることにした。

さらに、自己研修では課題《テーマ》の内容により、短期で終わるものや、長期にわたるものなど内容により期間が異なる。今年度新たに取組む場合、一度のみのサイクルで終わる場合や複数回繰り返す場合など違いが想定される。来年度から行われる2年目研修においても同様のことが考えられるのでいくつかのパターンを準備する必要がある。

また、ポートフォリオについてはプライバシーや著作権上の問題を有する場合が多いので、研究協力員への配慮のお願いと、当センター側でのチェックを確実にし作成することを確認した。さらに、研究協力員がとりためた膨大なポートフォリオの中から、事例にまとめる内容を、「自己研修の進め方」十の段階に即した資料を担当する当センター所員が選定した。これは、2年目研修対象者が進めていく上で参考になるポートフォリオを中心に手引にまとめ、自己研修の取組に活用することを目的としている。選定したものについては、「自己研修の進め方」でどの段階で活用されたものかわかるように、当センター所員が付箋の形で付加し、注釈を追加する。（現在作成中）

3 自己研修の研修講座とアンケートの分析

(1) 講義「自己研修の意義と進め方」

研修体系の見直しにより、自己研修に関わ【表1】各校種と自己研修の講座
る講義は右の表のようになっている。

初任者研修では、2年目研修で個々に取り組むことを考え2～3時間設定している。小

・中学校は2回に分け、1回目は自己研修の基本的な考え方、2回目は前半の5段階を考

	自己研修Ⅰ	自己研修Ⅱ
小学校初任者研修	1.5h	1.5h
中学校初任者研修	1.5h	1.5h
高等学校初任者研修	2h	—
特別支援学校初任者研	3h	—
小学校5年研	1h	—
中学校5年研	1.5h	—
高等学校5年研	2h	—
特別支援5年研	2h	—

えることを中心にして学校で実践できる内容とした。（補助資料1～4ページ）

高等学校、特別支援学校では、自己研修の講義が1回設定されており小・中学校の内容をまとめて行う。（補助資料5～7ページ）

教職経験者5年研修講座では、自己研修の手法のみを研修する。自己研修の基本的な考え方を知り、「指導の場面」で活用できる教員を目指している。しかし、25年度より初任者研修講座で自己研修の講義を行っているため平成30年度以降の教職経験者5年研修講座より本講義は改編する必要がある。

(2) 講義「自己研修の意義と進め方」受講者アンケートの分析

ア 小学校初任者研修講座のアンケート分析

小学校の講義「自己研修の意義と進め方Ⅰ」で受講者39名に対してアンケート（補助資料1ページ）を行った。「自己研修（アクション・リサーチ）の手法を理解することができた」研修者は46.1%（18名）、「ややできた」研修者が53.9%（21名）であった。「今後の教育活動で、いかしてみたいと思いますか」の問いでは「ぜひいかしてみたい」は89.8%（35名）、「いかしてみたい」は10.2%（4名）であった。

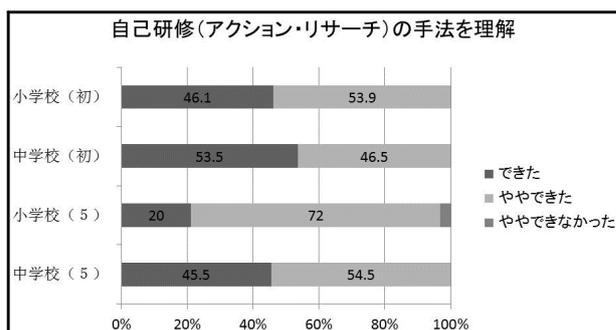
また、どういう場面で活用してみたいかという問いに対し、「授業をはじめ、学級経営や学年経営などに。また、自己研鑽に使いたい。」や「日々の授業改善という視点で取り組みたい。」など理想の教師像を目指す内容や、現在担任してる児童生徒に対して、「子どもたちに見通しと意欲をもたせる導入の工夫」「自分の考えを分かりやすく伝える児童を増加させることについて」という教師としての願いを感じ取ることができた。（補助資料5～8ページ）

「自己研修の意義と進め方Ⅰ」と「自己研修の意義と進め方Ⅱ」を比較した場合、はじめの講義での課題設定は学習指導の割合が100%に対し、2回目の講義では学習指導57.9%（22名）、学級経営42.1%（16名）と変化した。はじめの講義では学習指導に課題を認識し自己研修のテーマを設定したものとする。そして、2回目の講義においては、学習指導の土台ともなる学級経営能力や児童の主体性や互いを認め合える関係性を構築することに視点を移した研修者が多数いた。

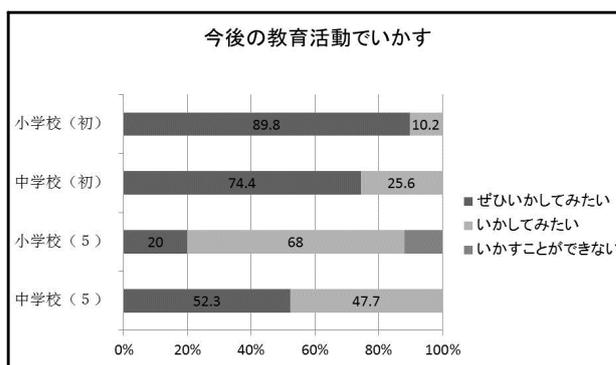
イ 中学校初任者研修講座のアンケート分析

中学校の講義「自己研修の意義と進め方Ⅰ」で受講者43名に対してアンケート（補助資料1ページ）を行った。「自己研修（アクション・リサーチ）の手法を理解することができた」研修者は53.5%（23名）、「ややできた」研修者が46.5%（20名）であった。「今後の教育活動で、いかしてみたいと思いますか」の問いでは「ぜひいかしてみたい」は74.4%（32名）、「いかしてみたい」は25.6%（11名）であった。

「自己研修の意義と進め方Ⅰ」と「自己研修の意義と進め方Ⅱ」を比較した場合、はじめの講義での課題設定は学習指導の割合が100%に対し、2回目の講義では学習指導65.1%（28名）、学級経営23.3%（10名）、児童生徒理解、生徒指導11.6%（5名）と変化した。これから、教科担当の学習指導だけではなく、学級経営における生徒のやる気を喚起させることや、気になる生徒の環境を改善したいという教師として意識の深化が感じられる。（補助資料9～11ページ）



【図2】自己研修の手法を理解



【図3】今後の教育活動でいかす

ウ 高等学校初任者研修講座のアンケート分析

高等学校の講義「自己研修の意義と進め方」で受講者41名に対してアンケート（補助資料1ページ）を行った。「自己研修（アクション・リサーチ）の手法を理解することができた」研修者は34.1%（14名）、「ややできた」研修者が65.9%（27名）であった。「今後の教育活動で、いかしてみたいと思いますか」の問いでは「ぜひいかしてみたい」は65.9%（27名）、「いかしてみたい」は34.1%（14名）であった。

高等学校の初任者研修講座では、教科指導を中心にアクション・リサーチの手法を学んだため、課題《テーマ》は教科の専門性が高くなっている。（補助資料12～16ページ）しかし、アンケートの内容では授業改善だけにとどまらず、クラス経営や部活動等でもいかしてみたいとの記述があった。

エ 特別支援学校初任者研修講座のアンケート分析

特別支援学校の講義「自己研修の意義と進め方」で受講者26名に対してアンケート（補助資料1ページ）を行った。「自己研修（アクション・リサーチ）の手法を理解することができた」研修者は23.1%（6名）、「ややできた」研修者が69.3%（18名）、「ややできない」3.8%（1名）、無回答3.8%（1名）であった。「今後の教育活動で、いかしてみたいと思いますか」の問いでは「ぜひいかしてみたい」は46.2%（12名）、「いかしてみたい」は53.8%（14名）であった。

特別支援学校の初任者研修講座では、学習指導上の課題《テーマ》をあげる研修者もいたが、「他害行動のある生徒への指導のあり方」や「コミュニケーション力を高めるための支援のあり方」という児童生徒理解、生徒指導上の課題《テーマ》設定も多く見られた。（補助資料17～19ページ）

オ 小学校教職経験者5年研修講座のアンケート分析

小学校教職経験者5年研修講座の講義「自己研修の意義と進め方」で受講者25名に対してアンケート（補助資料1ページ）を行った。「自己研修（アクション・リサーチ）の手法を理解することができた」研修者は20.0%（5名）、「ややできた」研修者が72.0%（18名）、「ややできなかった」研修者が8.0%（2名）であった。「今後の教育活動で、いかしてみたいと思いますか」の問いでは「ぜひいかしてみたい」は20.0%（5名）、「いかしてみたい」は68.0%（17名）、「いかすことができない」が12.0%（3名）であった。「いかすことができない」理由としては、自己研修のための時間がとれないや職務に追われている、課題を明確にするのが難しいということが挙げられた。

カ 中学校教職経験者5年研修講座のアンケート分析

中学校教職経験者5年研修講座の講義「自己研修の意義と進め方」で受講者44名（養護教諭、栄養教諭を含む）に対してアンケート（補助資料1ページ）を行った。「自己研修（アクション・リサーチ）の手法を理解することができた」研修者は45.5%（20名）、「ややできた」研修者が54.5%（24名）であった。「今後の教育活動で、いかしてみたいと思いますか」の問いでは「ぜひいかしてみたい」は52.3%（23名）、「いかしてみたい」は47.7%（21名）であった。課題《自己研修のテーマ》としては、全員が学習指導について挙げており、養護教諭や栄養教諭からは、保健指導や食育について挙げられていた。養護教諭や栄養教諭の場合は、単に学習指導を行うだけではなく学校全体として取り組まなければならないことや生徒個々に対応しなければいけない場面も想定される。これからも養護教諭や栄養教諭に対して講義「自己研修の意義と進め方」を進めていくのであれば、講義の内容や自己研修の

実際の進め方などを吟味していかなければならない。(補助資料20～23ページ)

4 「自己研修の進め方」テキストを活用した研修会

県内のN中学校の校内研究において自己研修（アクション・リサーチ）の手法を使い研究を進めたいので、校内研修会講師の依頼があった。研修会は全職員を対象に、テキストを用いて、自己研修の基本的な考え方を中心に進めた。校内研究という特性上、学習指導のみに内容が統一される。自己研修は学習指導のみに限定することも可能であるが、自己研修は個々の課題や取組を重視しているため、振り返りも個々でまとめることになる。校内研究は研究紀要等を作成することを考えると、統一されたテーマで書き表すことが求められるが、自己研修の考えに反すとも言える。校内研究で自己研修（アクション・リサーチ）を用いる場合には、OJT (on the job training)等を取り入れ組織的に、工夫や改善を行いながら自己研修を進める必要があると考える。

5 「自己研修の進め方」手引の作成

(1) 「自己研修の進め方」テキストの見直し

平成26年度に行った講義「自己研修の意義と進め方」の反省をいかし、研修者の視点に立ったテキストの見直しを行う。さらに、事例の内容やポートフォリオと連動したテキスト作成を平成26年度中に行い、「自己研修の進め方」テキストは平成27年度版として活用する。

(2) 「自己研修の進め方」手引

「自己研修の進め方」手引は、「自己研修の進め方」テキストと研究協力員から提出された事例をもとに作成する。さらに事例は、一連の流れをまとめた「自己研修レポート」とポートフォリオで構成される。

V 研究のまとめと今後の課題

1 研究の成果

- (1) 研究協力員の方々の協力により、「自己研修の進め方」手引を作成することができた。
- (2) 講義「自己研修の意義と進め方」でテキストを活用することにより、内容を見直し、改編する見通しを立てることができた。

2 今後の課題

- (1) 平成27年度以降の2年目研修、3年目研修の講義「自己研修の意義と進め方」の運営や進め方の方向性を見いだすことが必要となる。
- (2) 各校種における「指導の場面」毎の事例の充実や、養護教諭と栄養教諭における自己研修の進め方や事例の収集が今後必要と考える。
- (3) 作成した手引を有効活用するために、講義「自己研修の意義と進め方」の内容の見直しが必要になる。

<おわりに>

この研究を進めるにあたり、ご協力いただきました研究協力機関並びに研究協力員の先生方に心からお礼申し上げます。

【引用Webページ】

文部科学省 教員の資質能力向上 特別部会

教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo11/sonota/_icsFiles/afieldfile/2012/05/15/1321079_1.pdf

【参考Webページ】

文部科学省 教員の資質能力向上 特別部会

http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo11/

【参考文献】

春原憲一郎 (2006), 『日本語教師の成長と自己研修』, 凡人社

三上明洋 (2010), 『ワークシートを活用した実践アクション・リサーチ』, 大修館書店

矢守克也 (2010), 『アクションリサーチ』, 新曜社

横溝紳一郎 (2000), 『日本語教師のためのアクション・リサーチ』, 凡人社

Ernest T. Stringer (2012), 『アクション・リサーチ』, 星雲社

ジャック・C・リチャーズ/チャールズ・ロックハート (2000), 『英語教育のアクション・リサーチ』, 研究者出版株式会社